



Japanese Poem of 31syllables
*Haiku Poem*Comic Haiku*

俳句 (ぎんなん俳句会)

天心に月を残して應渡る
燃えるだけ燃えて淋しや曼珠沙華
水澄むや山湖が風を捉へをり
人知れず実を結びたり草の花
爽籟の渡る湖畔に竿投げて
秋仕舞鳥居の元の道祖神
どこまでも白どこまでも蕎麦の花
秋麗や黒煙上げる阿蘇の山
砂浜に秋の麦わら帽子かな
嬰兒の泣いて勝ちなり草相撲
竿竹に雲の光る良夜かな
拍手を風に納めて草は実に

富山 達次
富山 茂子
和田千恵子
吉村 万里
日黒 文恵
本村 光子
北川 雨水
刀坂山美子
堂園 悦子
今井 洋子
川上 豊
和田 洋文

さつま狂句 (有明町さつま狂句同好会)

兼題 「風邪」 入れ葉ゆ 頼つ風邪どま 神頼ん 丸目南兵衛

〔評〕今はJAの置き葉がある。従前は有名な越中富山の万金丹が各家庭に入り、例の紙風船の記憶も残る。医療未開花の頃の家庭葉の思い出か。富山は直線約八六〇キロ。

兼題 「夢」 長げ入院 ビール焼酎どが 夢い出っ 小蓬原忠則

〔評〕元気に過ごせて有難い事だ」と思っていた矢先、突然入院の羽目に陥った。予期しない長期病臥に、以前愛したビール焼酎が夢に出る。如何せん回復を待ち家族で乾杯。

兼題 「彼岸」 蕎麦作付い 彼岸皿丈 爺ん説論 畑山 敏昭

〔評〕二十日は農家の厄日。蕎麦作りは、播き時を工夫しその頃まだ地中であって、彼岸の頃に皿を伏せた高さ位が良いと、篤農翁の講話。中七は具体性で面白い表現

短歌 (松山南船短歌会)

二つの葬うなじ哀しや昼もすぎ生きの証の焼きそほの味
灰色のひと月からすの姿なく雨の車道は狸のむくろ
冬枯れの山肌陰に根雪あり四月の風に山吹萌え出づ
ひと月振りほうびのように外出の許可得し夫の軽き足どり
診察の医師の眼差しやさしさに癒されおりぬ梅雨のひとつき
うなだれて勘弁してよと訴える南京はぜは雨の重さに
牧水の歌を読みつつ青春に聴きしあの日の城山の鐘
四十年生き来し桜の大木に木漏れ日もうら若の青さよ
チツチツと雀さえずる梅雨晴れ間ぼんやり眼に感謝の光
紫陽花が色とりどりの花咲かせ雨を喜び重たげに揺る
難聴の母の耳には「はひふへほ」吐息のような音は届かず

畑 美佐子
前原 恭
川添八重子
野口 順子
石橋 道子
中島 昭
吉元ミチ子
大迫 鈴子
藤田ミチ子
山口 カツ
高倉 律子

～『志』・季・折・々～
市内の美しい風景や、歴史、文化を感じさせてくれるものを写真で紹介し、読者の皆様からの写真の追加もお待ちしています。

【今月の1枚: ススキ野原(志布志港新若浜地区)】